

充実感の観点から見た大学生の自己開示動機

小林 真・宮原 千佳*

Student's Motivation to Self-Disclosure in Perspective of Fulfilment Sentiment

Makoto KOBAYASHI and Chika MIYAHARA

要 約

本研究では、大学生を対象に日々の生活に関する充実感と、自己開示動機を調査した。因子分析によって、充実感と自己開示動機の尺度からそれぞれ3因子が抽出された。充実感の3因子をもとに学生を7つのクラスターに分類し、充実感と自己開示動機の特徴を検討した。その結果、充実感が低い(特に孤独感が高い)学生は、他者からの受容的なサポートを求めるために自己開示をしたいと考えていることが示された。また、自己開示動機が低いクラスターが2つ存在することも示された。学生支援という観点から、この2つのクラスターについては、生育歴や自己像などの調査が必要であることを提言している。

問題と目的

安藤(1986)は、従来の自己開示に関する定義を「伝達内容」と「伝達行為」の2つの観点から整理し、自己開示を「特定の他者に対して、言語を介して意図的に伝達される自分自身に関する情報、およびその伝達行為」と定義している。安藤(1986)によれば、自己開示の機能は①感情表出、②自己明確化、③社会的妥当化、④報酬機能、⑤社会的コントロール、⑥親密度・プライバシーの調整という6つが存在する。このような機能が十分に果たされることによって、開示者の精神的健康が維持されると考えられる。

自己開示と精神的健康の関連性については、これまでに多くの研究がなされてきた。特にアイデンティティを確立する時期である青年期後期には(Erinson, 1950)、自己概念を肯定的な状態に保ったり、他者との関係を円滑に進めたりするために自己開示が重要な役割を持つてくる。安東(1995)は、青年期には他者との比較の中で自己をどのようにとらえるか試行錯誤していると述べている。

それでは、実際に大学生の自己開示と精神的健康の間にはどのような関係があるのだろうか。丸山・今川(2001)は自己開示の程度が高い者ほど自己受容できていることを報告している。また、自己開示をあまりしない群では、自己開示性が低いほど自己

開示後の不快感が増大するが、自己開示をする群では自己開示性が直接ストレス反応の増大につながることはなかったという。

福岡(2005)は大学生を対象に、アドバイスをしてくれたり愚痴を聞いたりしてくれるなど、友人からのソーシャルサポートの入手可能性8項目と自己開示性との関連性を調べた。その結果、8つのサポート入手可能性は全て自己開示性と有意な正の相関を示した。すなわち、自己開示性が高いものは友人からサポートを受けられると考えていることが明らかになった。

このように、大学生において自己開示を行うことは、自分の話を聞いてくれる他者の存在によって自己受容を高めたり、ソーシャルサポートを得たりする機能を持つことがわかる。したがって、自己開示を行うことは精神的健康の維持に有効だといえる。しかし、自己開示をしたいと思ってもそれを実行できない場合や、そもそも他者に自分のことをわかってもらおうと考えていない青年も存在すると思われる。小野寺・河村(2002)は、自己開示を行うか否かには、本人自身の社会性、ソーシャルスキルの必要性を指摘している。そこで、自己開示を実行するかどうかとは別に、自己開示をしたいと思っているか、すなわち自己開示動機と精神的健康との関連性を検討することで、従来の自己開示研究とは異なる新たな知見が得られる可能性がある。

榎本(1989)は、なぜ自分が他者に自己開示をしようとするのかという自己開示の理由づけを、自己

*富山県高岡児童相談所

I 予備調査

開示動機と呼んだ。榎本(1997)は、調査結果に基づいて、自己開示動機を①理解・共感追求、②情動解放、③親密感追求、④相談という4つの動機に分類した。それぞれの動機の内容は次の通りである。

- ①理解・共感自己開示動機：苦しい胸のうちを誰かに分かってほしい時に、心理的に近い心の許せる相手に自己開示をしたいと思うことを指す。
- ②情動解放自己開示動機：誰かに話すことでスッキリしたい時、深いかかわりのない相手に自己開示をしたいと思うことを指す。
- ③親密感追求的自己開示動機：寂しい時や他者から好かれたい相手に自己開示をしたいと思うことで、大学生では主に異性に向けて行われる。
- ④相談的自己開示動機：信頼できる相手に自己開示をしようと思うことを指す。

このように、自己開示動機は自分がどのような人間関係を求めているかを表している。したがって、各自の精神的な健康状態によって人間関係の求め方が異なってくると考えられる。

一般に、青年期の精神的健康度を測定する際には自己肯定感という概念が用いられる。大野(1984)は、充実感を「青年が健康な自我同一性を統合していく過程で感じられる自己肯定的な感情」と定義している。したがって、大野(1984)が作成した充実感尺度は、自己肯定感の測度として使用することが可能であると思われる。

しかし大野(1984)によれば、充実感は単一の概念ではなく複数の因子からなっている。したがって、多様な充実感の要素をどの程度有するかというパターンによって大学生をいくつかのタイプに分類することで、人間関係の求め方を把握することが可能となる。

以上の議論を踏まえ、本研究では充実感の保有パターンによって個人をいくつかのタイプに分類し、そのタイプ毎に自己開示動機がどのように異なるかを検討する。しかし自己開示動機に関しては、小口(1990)も独自の尺度(SMI)を作成している。そこで、まず予備調査において榎本(1997)と小口(1990)の尺度を比較検討し、あらたな自己開示動機尺度を作成する。本調査では、あらたに作成した自己開示動機尺度を使用し、充実感のタイプと自己開示動機との関連性を検討する。

目的 本調査で用いるために、自己開示動機尺度の項目を検討する。

方法

- (1) **対象者** 富山県内の大学生102名(男性37名、女性64名、無記入1名)で、平均年齢は21.25歳(SD=1.29)であった。
- (2) **手続き** 質調査を実施した。調査内容は、榎本(1997)の自己開示動機に関する尺度20項目と、小口(1990)のSMI(自己開示動機質問紙)20項目からなる。
- (3) **調査時期** 2007年10月下旬から11月上旬に実施した。

結果

- (1) **榎本の尺度の因子分析** 榎本(1997)の14項目について、因子分析(主因子法、Varimax回転)を行ったところ、複数の因子に高い負荷量を示す項目があった。それらの5項目を除いた9項目で改めて因子分析を行ったところ、固有値1の基準で2つの因子が抽出された(Table 1)。2つの因子による説明率は37.5%であった。因子の内的整合性は、第1因子が $\alpha = .736$ 、第2因子が $\alpha = .674$ であった。

Table 1 に示すように、第1因子には、「悩みを抱えているとき」や「悲しみやつらさに打ちひしがれているとき」といった項目が負荷していたので「同意」と命名した。第2因子には、「未知の状況を前にして不安が高まっているとき」や「自分だけがみんなと違うのではないかと不安になるため」といった項目が負荷していたので「相談」と命名した。

- (2) **小口の尺度の因子分析** 小口(1990)のSMI尺度について、因子分析(主因子法、Varimax回転)を行ったところ、複数の因子に高い負荷量を示す項目があった。それらの9項目を除いた12項目について改めて因子分析を行ったところ、固有値1の基準で4つの因子が抽出された(Table 2)。4因子による説明率は52.6%であった。各因子の内的整合性は $\alpha = .804 \sim .679$ であった。

第1因子には「相手が自分と係わりあるため」や「相手が本人のことを話したため」といった項目が負荷していたので、「相手の尊重」と命名し

Table 1 標本の自己開示動機 9 項目の因子分析結果 (varimax 回転後)

No	項目の内容	第1因子	第2因子	共通性
第1因子 同意 ($\alpha=.736$)				
10	悩みを抱えているとき	.747	.028	.560
8	悲しみやつらさに打ちひしがれているとき	.703	.101	.504
11	さびしさを感じる時	.632	.262	.468
3	とても頭にくることがあり、胸の中にしまっておけないとき	.437	.239	.248
第2因子 相談 ($\alpha=.674$)				
14	未知の状況を前にして、不安が高まっているとき	.262	.699	.557
7	自分だけがみんなと違うのではないかと不安になるとき	.090	.616	.388
1	自分の考えや選択が正しいかどうか不安で、確かめたいとき	.171	.580	.366
6	相手から好意を得たいとき	.043	.477	.229
13	重大な決断を迫られ、迷っているとき	.064	.229	.057
固有値		1.755	1.622	—
寄与率(累積寄与率)		19.503	18.018	37.521

Table 2 SMI 12項目の因子分析結果 (varimax 回転後)

No	項目の内容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
第1因子 相手の尊重 ($\alpha=.724$)						
18	相手が自分と係わりあるため	.714	.072	.091	.048	.526
8	相手が本人のことを話したため	.665	.214	.208	-.026	.531
11	礼儀であるため	.587	.279	-.041	.216	.471
3	相手との親密な人間関係を作るため	.488	-.008	.046	.033	.241
第2因子 衝動的回避 ($\alpha=.804$)						
20	誤って口にしてしまったため	.143	.931	.155	.194	.950
21	話題が他にないため	.252	.632	.094	.248	.533
第3因子 情動開放 ($\alpha=.706$)						
1	自分の気持ちを分かってもらいたいため	.016	-.053	.711	.400	.668
19	気分が高まって(落ちこんで)いるため	.225	.203	.670	-.066	.544
3	自分の中にしまっておきたくないため	.050	.069	.661	.057	.447
第4因子 意図的な自己呈示 ($\alpha=.679$)						
5	人と同じであること、違うことを示すため	.192	.205	.027	.677	.538
4	相手からの評価を得るため	.112	.006	.223	.634	.464
6	自分のイメージを変えたり、保ったりするため	-.087	.246	-.009	.573	.397
固有値		1.728	1.546	1.529	1.506	—
寄与率(累積寄与率)		14.401	12.886	12.741	12.549	52.577

た。第2因子には「誤って口にしてしまったため」や「話題が他にないため」といった項目が負荷していたので、「衝動的回避」と命名した。第3因子には「自分の気持ちを分かってもらいたいため」や「気分が高まって(落ちこんで)いるため」といった項目が負荷していたので、「情動開放」と命名した。第4因子には「人と同じであること、違うことを示すため」や「相手からの評価を得るため」といった項目が負荷していたので、「意図的な自己提示」と命名した。

(3) 2つの尺度を合わせた因子分析 2つの尺度を合わせた35項目について因子分析(主因子法, Varimax 回転)を行ったところ、複数の因子に高い負荷量を示す項目があった。それらの22項目を除いた13項目について改めて因子分析を行ったところ、固有値1の基準で4つの因子が抽出された(Table 3)。4因子による説明率は49.9%であった。各因子の内的整合性は $\alpha=.745\sim.685$ であった。

第1因子には「自分の気持ちや考えを誰かに

Table 3 2つの尺度を合わせた13項目の因子分析結果 (varimax 回転後)

No	項目の内容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
第1因子 情動開放 ($\alpha = .709$)						
E2	自分の気持ちや考えを誰かに理解してほしいとき	.784	.028	.241	.125	.689
E3	とても頭にくることがあり, 胸の中にしまっておけないとき	.665	.069	.077	.253	.517
O3	自分の中にしまっておきたくないため	.581	.073	.177	.182	.408
E4	良いことがあり, うれしくてたまらないとき	.364	.083	.223	-.195	.228
第2因子 状況への対応 ($\alpha = .745$)						
O20	誤って口にしてしまったため	.171	.874	.029	.150	.816
O21	話題が他にないため	.066	.775	.249	-.054	.670
O15	その場の雰囲気に合わせているため	-.016	.458	.247	-.089	.279
第3因子 他者との関係維持 ($\alpha = .687$)						
E6	相手から好意を得たいとき	.095	.170	.777	-.048	.644
O4	相手からの評価を得るため	.256	.170	.553	-.093	.409
E14	未知の状況を前にして, 不安が高まっているとき	.222	.090	.492	.289	.383
E7	自分だけがみんなと違うのではないかと不安になるとき	.155	.156	.420	.152	.248
第4因子 共感的サポート希求 ($\alpha = .685$)						
E8	悲しみやつらさに打ちひしがれているとき	.056	-.029	.120	.893	.816
E10	悩みを抱えているとき	.283	.003	-.022	.558	.392
固有値		1.792	1.683	1.612	1.411	—
寄与率 (累積寄与率)		13.786	12.947	12.400	10.850	49.983

理解してほしいとき」や「とても頭にくることがあり, 胸の中にしまっておけないとき」といった項目が負荷していたので、「情動開放」と命名した。第2因子には「誤って口にしてしまったため」や「話題が他にないため」といった項目が負荷していたので、「状況への対応」と命名した。第3因子には「相手からの好意を得たいとき」や「相手からの評価を得るため」といった項目が負荷していたので、「他者との関係維持」と命名した。第4因子には「悲しみやつらさに打ちひしがれているとき」や「悩みをかかえているとき」といった項目が負荷したので、「共感的サポート希求」と命名した。2つの尺度には同じ様な内容の項目が存在しており, それらが混在して因子を構成していた。第2因子の「状況への適応」はSMIの項目だけで形成されている。

考察

榎本(1997)では, 自己開示動機は4因子からなっていた。今回の予備調査においては, 第2因子は原尺度の「相談的自己開示動機」の項目が負荷していた。しかし第1因子には, それ以外の因子の項目が混在していた。その中では, 「理解・共感自己開示動機」の要素が多く見られる。また小口(1990)では, 自己開示動機は3因子からなっていた。今

回の予備調査では, 開示場面ごとの自己開示動機が表れている。

榎本(1997)の尺度は自己開示したいという「気持ち」を表す項目からなる尺度である。一方, 小口のSMIは「気持ち」と「状況(場面)」が混在した尺度である。そこで本研究では, なぜ自己開示をするのかという「気持ち」を測定する榎本の尺度を原版とする。

しかし小口(1990)のSMIにも自己開示をしようとする「意図」を反映した項目が存在する。そこでSMIの項目から自己開示の「意図」が反映されると思われる項目を, 著者2名と心理学を専攻する学生2名の協議によって選出した。その際に, SMIに見られる「○○なため」という表現の方が, 自己の内的な部分をより深く尋ねているという意見が出された。これを踏まえて, 榎本(1997)にSMIの一部を加え, 文章表現を変更した自己開示動機尺度を作成した。

II 本調査

目的 自己開示動機のタイプを分類し, 充実感との関連性を検討する。

方法

- (1) **対象者** 富山県内の大学生203名(男性76名, 女性127名)で, 平均年齢は21.3歳(SD=2.63)であった。
- (2) **手続き** 質問紙調査を実施した。245部を個別に配布し, そのうち有効回答は203部であった。
- (3) **調査内容** 調査にあたっては4つの尺度からなる質問紙を使用した。本研究では充実感と自己開示動機の2つの尺度のみを分析に用いる。なお両尺度とも, 「よく当てはまる」を5点とする5件法で回答を求めた。
- ①**充実感尺度** 大野(1984)の作成した尺度を用いた。この尺度は, 充実感気分-退屈・空虚感因子, 自立・自信-甘え・自信のなさ因子, 連帯-孤立因子, 信頼・時間的展望-不信・時間的展望の拡散因子という4因子から構成されており, 現在における自分の充実感を測定する20項目からなっている。
- ②**自己開示動機尺度** 榎本(1997)の自己開示動機尺度と小口(1990)のSMI尺度を基に予備調査を行い, 23項目からなる尺度を構成した。
- (4) **調査時期** 2007年12月に実施した。

結果

- (1) **各尺度の因子分析** 自己開示動機および充実感の尺度を因子分析した。固有値の減衰状況を見な

がら因子数を決定し, 主因子法・promax 回転を実施した。

①**充実感尺度** 充実感に関しては3因子解を採択した(Table 4)。第1因子には「毎日, 毎日変化のない単調な日々でつまらない」という項目が負に負荷し, 「生活に充実感で満ちた楽しさがある」という項目が正に負荷したので, 「充実感」因子と命名した。第2因子には「自分の信念に基づいて生きている」「私には毎日の生活の中で何かへの使命感がある」などの項目が負荷したので, 「責任感」と命名した。第3因子には「私ひとりを取り残されているようで寂しい」「誰も私を相手にしてくれないような気がする」などの項目が負荷したので, 「孤独感」と命名した。

②**自己開示動機尺度** 自己開示動機に関しては3因子解を採択した(Table 5)。第1因子には「自分のイメージを保つため」「人と違うことを示すため」などの因子が負荷したので, 「自己イメージの提示」因子と命名した。第2因子には「よいことがあり, うれしくてたまらないため」「道の状況を前にして, 不安が高まっているため」などの項目が負荷したので, 「共感的サポート希求」と命名した。第3因子には「全てがむなししいような思いにとらわれるため」「寂しさを感じるた

Table 4 充実感の因子パターン行列

No	項 目	第1因子	第2因子	第3因子
第1因子 充実感				
充実13	毎日, 毎日, 変化のない単調な日々でつまらない	-0.991	.235	-0.019
充実5	毎日の生活に退屈している	-0.845	.204	.090
充実9	生活に充実感で満ちた楽しさがある	.626	.180	.004
充実1	毎日の生活にはりがある	.623	.119	-0.018
充実17	私は生きがいのある生活をしている	.563	.413	.015
充実12	私は価値のある生活をしていると思う	.441	.332	-0.037
第2因子 責任感				
充実10	自分の信念にもとづいて生きている	-0.057	.705	-0.043
充実4	私には毎日の生活の中で何かへの使命感がある	.052	.629	.285
充実16	自分の責任を果たすことに喜びを感じる	-0.170	.582	-0.056
充実20	毎日の生活の中でものをやり遂げる喜びがある	-0.022	.578	-0.216
第3因子 孤独感				
充実3	私一人が取り残されているようで寂しい	.086	.081	.803
充実11	誰も私を相手にしてくれないような気がする	-0.002	-0.202	.551
充実15	自分がなさげなく嫌になる	-0.225	.070	.459
充実19	私をわかってくれる人がいないと思う	-0.131	-0.010	.454
		因子相関	第2因子	第3因子
		第1因子	.591	-.473
		第2因子		-.264

Table 5 自己開示動機の因子パターン行列

No	項 目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子
第 1 因子 自己イメージの提示				
動機20	自分のイメージを保つため	.746	-.063	-.045
動機18	人と違うことを示すため	.697	-.120	.078
動機19	自分のイメージを変えるため	.674	-.187	.157
動機21	その場の雰囲気に合わせてため	.612	.079	-.149
動機16	相手からの評価を得るため	.519	.252	-.079
動機17	人と同じであることを示すため	.516	.081	.218
動機23	話題が他にないため	.501	.060	.045
動機 6	相手から好意を得たいため	.425	.302	-.076
動機22	誤って口にしてしまったため	.407	.120	.027
第 2 因子 共感的サポート希求				
動機 4	よいことがあり、うれしくてたまらないため	.008	.736	-.098
動機 2	自分の気持ちや考えをだれかに理解してほしいため	-.018	.585	.098
動機 9	思いがけない発見をしたため	.083	.570	-.227
動機14	未知の状況を前にして、不安が高まっているため	.139	.506	.074
動機13	重大な決断を迫られ、迷っているため	.021	.493	.019
動機 1	自分の考えや選択が正しいかどうか不安で、確かめたいため	.113	.469	.101
動機 3	とても頭にくることがあり、胸の中にしまっておけないため	-.136	.459	.214
第 3 因子 受容的サポート希求				
動機12	全てが虚しいような思いに捕らわれるため	.106	-.225	.871
動機11	さびしさを感じるため	.100	.041	.673
動機 8	悲しみやつらさに打ちひしがれているため	-.029	.296	.520
動機10	悩みを抱えているため	-.237	.354	.518
		因子間相関	第 2 因子	第 3 因子
		第 1 因子	.243	.179
		第 2 因子		.520

め」などの項目が負荷したので、「受容的サポート希求」と命名した。

(2) 充実感に基づいたクラスター分類 大学生の充実感のタイプを検討するため、因子得点の平方ユークリッド距離を用いて最長距離法によるクラスター結合を試みた。3~8 個のクラスターを作成し、回答者の特徴を検討した結果、7 クラスター解を採択した。各クラスターの特徴を明らかにするため、7 つのクラスターを独立変数とし、充実感の 3 つの因子得点を従属変数とする多変量分散分析を行った。その結果、 $\Lambda = .054, F(18, 535) = 53.53$ ($p < .001$) で有意な多変量主効果が得られた。単変量に関しては、第 1 因子で $F = 73.60$ 、第 2 因子で $F = 94.37$ 、第 3 因子で $F = 81.95$ となり、いずれも 0.1% 水準で有意な主効果が得られた ($df = 6, 191$)。

修正 Tukey 法による多重比較の結果、充実感に関しては $CL3 < CL6 \cdot CL2 < CL7 < CL4 \cdot CL1 <$

$CL5$ であることが示された。責任感に関しては $CL3 < CL6 \cdot CL2 < CL4 \cdot CL7 < CL1 \cdot CL5$ であることが示された。孤独感に関しては、 $CL5 < CL4 \cdot CL2 < CL1 \cdot CL7 < CL3$ および $CL1 < CL6 < CL3$ であることが示された。各クラスターの充実感の平均値を Figure 1 に示す。

(3) 各クラスターの自己開示動機 7 つのクラスターがどのような自己開示動機を有しているのかを検討するため、クラスターを独立変数とし、自己開示動機の 3 つの因子得点を従属変数とする多変量分散分析を実施した。 $\Lambda = .765, F(18, 518) = 2.86$ ($p < .001$) で有意な多変量主効果が得られた。単変量に関しては、第 1 因子で $F = 2.83$ ($p < .05$)、第 2 因子で $F = 2.39$ ($p < .05$)、第 3 因子で $F = 4.78$ ($p < .001$) で有意な主効果が得られた ($df = 6, 185$)。多重比較の結果から、自己イメージの提示については $CL5 < CL1 \cdot CL7$ 、受容的サポート希求については $CL2 < CL6 \cdot CL7 \cdot CL3$ 、 $CL5 < CL3$ であ

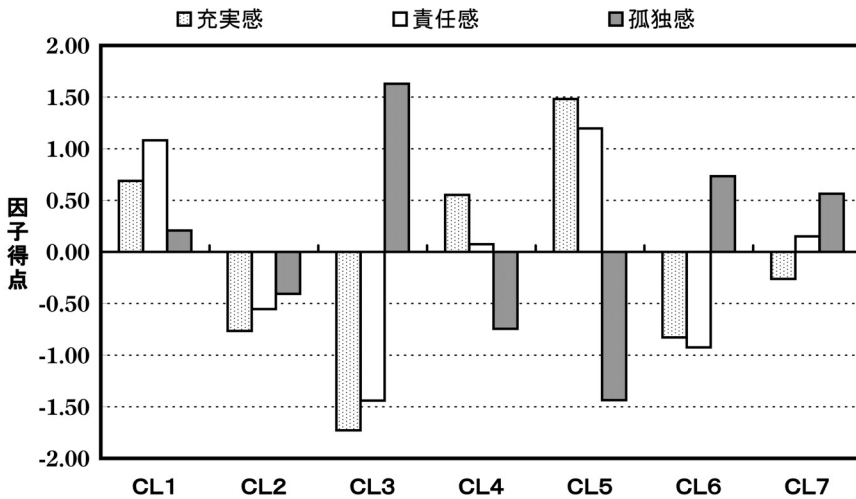


Figure 1 充実感のクラスター間の比較

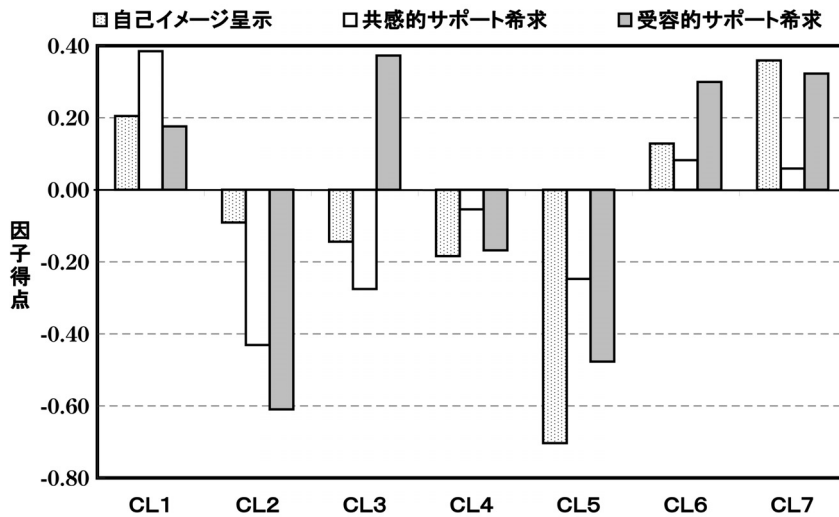


Figure 2 自己開示動機のクラスター間の比較

ることが示された。各クラスターの平均値を Figure 2 に示す。

考察

(1) 学生の精神的健康度(充実感)のタイプについて

クラスター分析と多変量分散分析に基づいて、大学生の充実感を7つのタイプに分類した。その結果、充実感が高く精神的に健康な学生とそうでない学生を確認することができた。

充実感が高いグループはCL1・CL5の2つであった。CL1は、充実感と責任感が高く孤独感が中程度であるので、おおむね精神的に健康なグループであると考えられる。またCL5は、充実感と責任感が最も高く、孤独感は最も低い。したがって充実感の観点から見る限り、最も精神的な健康度が高いグループであると考えられる。

充実感が低いのはCL2・CL3・CL6の3つであった。CL2は、充実感・責任感・孤独感がいずれも

平均よりも低いが、得点そのものは中程度(因子得点の平均値が-0.05程度)である。したがってこのクラスターは、やや精神的に不健康な傾向が見られるグループと考えられる。CL3は、充実感と責任感が最も低く孤独感が最も高い。すなわち、日々の生活を前向きにとらえることができず、孤独感だけが顕著に高いので、明らかに精神的に不健康な様子を呈しているといえる。CL6は、得点の傾向はCL3と同じであるが、充実感・責任感の低さと孤独感の高さはCL3ほど顕著ではない。したがって、慢性的にやや不調なグループといえる。

なお、CL4とCL7は、充実感の3つの因子得点の平均値がそれぞれ0～±.50程度であったので、精神的な健康状態は中程度だと考えられる。

(2) 充実感の観点から見た各クラスターの自己開示動機

クラスター間に自己開示動機の違いが見られたので、クラスターの特徴を検討する。

充実感・責任感が比較的高く孤独感が平均的なCL1は、3つの自己開示動機が全て正方向で中程度であった。このタイプは、他者に自分がどのように評価されるかに敏感であり、自己イメージ提示のために自己開示していると考えられる。したがって、青年期の特徴である他者評価を気にする傾向が示唆される。

充実感が全体的に低い中程度だったCL2は、自己開示動機の3つの因子が全て負の方向で、特に受容的サポート希求は最も低かった。このクラスターは充実感はいらないが、他者に自分を開示しようという欲求も有していない。すなわち、他者との関わりの中で、自分の生きがいや社会的責任を見つけようとはしておらず、受容されたいとも感じていない。おそらくこのタイプの学生は、自己開示をほとんどしないと推測される。その理由については、今後検討していく余地がある。

充実感・責任感が最も低く、孤独感が最も高かった CL3 は、受容的なサポート希求が最も高かった。CL3 と得点の傾向が似ている CL6 も、受容的なサポート希求がやや高かった。したがって、孤独感が高いこの 2 つのタイプの学生は、自分の存在を他者に承認してもらうことを強く望んでいるといえる。

充実感・責任感が最も高く、孤独感も低い CL5 は、自己イメージの提示動機が最も低く、受容的なサポートも求めない傾向にあった。CL5 は自分が他者からどのように評価されているか/受容されているかということに気にかけていないといえる。したがってこのタイプの学生の精神的健康度は、他者との関係性に依存していない可能性が高い。他者との関係性を希求しない CL5 の学生が、本当に精神的に健康であるとみなすことができるかどうか、今後の検討が必要である。

精神的な健康状態が中程度であると考えられる CL4 と CL7 では、自己開示動機のパターンが異なっていた。CL4 は全ての自己開示動機が負の方向で中程度であったのに対して、CL7 は、自己のイメージ提示動機が最も高く、受容的なサポート希求もやや高かった。CL4 は孤独感が負の方向であるのに対して、CL7 の孤独感は正方向であった。したがって自己開示動機の違いは、おそらく孤独感の感じ方に由来するのではないかと考えられる。つまり、CL7 の学生は孤独感を感じているために、自分を受容してもらいたいという欲求が高まった結果、よく思われたい(または嫌われたくない)という自己提示をしたり、受容されたいと願うのではないだろうか。

全体的考察

本研究では、大学生の精神的健康を充実感という観点からとらえ、抽出された 3 因子によるクラスター分析を行った。その結果、充実感のパターンによって他者との関係への希求が異なることが明らかになった。特に、孤独感を感じている学生は、受容的なサポートを望んでいることが明らかになった。

また、今回の研究結果の中で今後の検討課題となったのは、CL2 と CL5 である。いずれも自己開示動機が低く、他者に自分の情報を提供することを望んでいない特徴が見られた。そこで、なぜ自己開示動

機が低いのかを考察し、今後検討すべき課題を提言する。

まず CL2 の特徴について検討する。CL2 は充実感が全体的にやや低い、顕著に低いわけではない。したがって、毎日の生活はあまり充実してはいないが、精神的に苦痛を感じているほどでもない。つまり、何となく日々の生活を送っている状態だと考えられる。大学生生活そのものに魅力を感じていない可能性や、自分の将来像が描けないために生きがいが見つからない可能性など、充実感を感じられない理由はいくつか想定される。しかもこのタイプの学生は、他者に「わかってもらいたい」「受け止めてもらいたい」という欲求をほとんど有していないことがわかる。自己開示動機が低い理由として、他者に開示できるような自己に関する情報を有していない場合や、他者を信頼していないために開示したくないと感じている場合など、いくつかの可能性が考えられる。そこで今後は、こうした学生がどのような生育歴をたどってきたのか、大学に入学した目的は何か、自分の将来像をどのように描いているのか、などを調査する必要があるだろう。

佐藤・志村・深谷(2004)は、大学生の生活意識や時間的展望について調査を行った。その結果、これからの人生に興味を持たない学生が16.8%存在した。また、現在の自分の努力が将来に影響すると思えない学生が19.0%存在した。さらに、毎日が楽しく感じられないという学生が21.2%存在した。佐藤ら(2004)の調査から、現在の自己(大学時代に何をしたいのか)と将来の自己(どんな人生を送りたいのか)の間の関連を感じられない学生が2割程度いることが示された。おそらく CL2 には、こうした学生たちが多いのではないかと推測される。他者への信頼感と、肯定的で充実した自己概念のすくなくともいずれかが欠如しているとすれば、今後の学生支援を考える上でも、CL2 の特徴をより詳しく調査する必要がある。

本研究ではまた、充実感が高いが自己開示動機が低い CL5 の存在が示された。充実感という観点だけから見れば、このタイプの学生は精神的健康度が高く、日々の生活を充実して過ごしているように見える。しかし自己開示動機がほとんどないという実態を考慮すると、本当に精神的に健康であるといえるのか疑問が生じる。

自己開示動機が低いということは、他者と親密な

関係を作ろうとしないことを表している。他者との関係を構築しようとする理由には、次の2つの可能性が考えられる。第1に、自閉症スペクトラム傾向が疑われる場合である。Wing (1996) は、自閉症スペクトラム障害は知的能力がとても低い者から平均よりもずっと高い者までに生じると述べている。したがって、一定水準の知的能力を有する大学生の中にも、このような傾向を有する学生が必ず含まれている。Wing (1996) によれば、このスペクトラム者の中には他者から孤立し、情動的な関わり・共感性が見られないタイプや、孤立してはいないが自分から他者に働きかけないタイプがあるという。したがって、知的能力は通常レベルであっても、対人関係を構築しようとせず、自分の好きなことを追求している学生が存在する可能性は十分に考えられる。

こうした学生は、自分の好きなことに取り組んでいるので充実感が高い。場合によっては、使命感を感じて学業や仕事などに励んでいるかも知れない。そのこと自体はよいことであるが、卒業後の進路を考えた場合に、他者との関係構築ができないことは様々な支障を来しかねない。本人の長所を生かしつつ、どのような進路設計をしていくか、支援のありかたを慎重に検討する必要がある。斎藤・西村・吉永 (2010) は、発達障害のある学生やその疑いのある学生に対して、コミュニケーション能力の開発や就職活動支援などを行っている。もしCL5の中に、自閉症スペクトラム傾向を有する学生がいた場合には、他者との関係の中でいかに自分の長所を生かしていくか、という視点からの学生支援が必要であろう。

自己開示動機が低い第2の理由として、自己愛性パーソナリティ障害(およびその傾向)者である可能性が考えられる。American Psychiatric Association (2000)によれば、この障害の特徴は限りない成功や権力等への空想にとらわれていたり、他者への共感の欠如や尊大で傲慢な行動が見られたりすることである。このパーソナリティ者の場合には、自分は社会から認められるべき才能があり、自己を誇大にとらえる傾向がある。そのため、学業や仕事に熱中しているときには充実感を感じることができる。しかし基本的な心性として他者への不信感があるので、他者と親密な関係を構築しようとは考えない。むしろ他者は、自分の欲求を満たすための

手段であると考えていることが多い。したがって、自分の個人的な情報を他者に開示しようとはせず、他者からの共感・受容的なサポートを受けたいとも感じていない。

岡田 (2006) は、パーソナリティ障害が発症する原因として、社会的要因と生育環境(親子関係)の重要性を指摘している。したがって、パーソナリティ障害の可能性を検討するためにも、生育歴に関する調査は必要である。もしCL5の中にこうしたパーソナリティ者が含まれていた場合には、やはり将来的には他者との信頼関係を構築できるような支援が必要となってくる。

本稿では、孤独感が高いために受容的サポートを希求する学生と、自己開示を求めない学生の存在を指摘した。特に自己開示を求めない学生については、生育歴や自己像、時間的展望に関する体系的な調査が必要である。こうした情報を収集することで、大学在学中にどのような支援体制を作ればよいかを解明することが今後の課題である。

引用文献

- American Psychiatric Association 2000 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders* (4th ed. Text Revision). (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(訳) 2002 DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- 安藤清志 1986 対人関係における自己開示の機能 東京女子大学紀要編集, **36**, 167-199.
- 安東末廣 1995 人間関係の発達3—青年期以降の人間関係— 安藤末廣・佐伯榮三編 人間関係を学ぶ 47-53 ナカニシヤ出版
- 榎本博明 1989 自己開示動機に関する研究 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 237.
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路出版
- Erikson, E. H 1950 *Childhood and Society*. W.W. Norton & Company, Inc. (エリクソン, E. H. 仁科弥生訳 1977 幼児期と社会1 みすず書房)
- 丸山利弥・今川民雄 2001 対人関係の悩みについての自己開示がストレス低減に及ぼす影響, 対人社会心理学研究, **1**, 107-118.
- 小口孝司 1990 自己開示動機に関する基礎的研究

応用心理学研究, 15, 29-38

岡田尊司 2006 パーソナリティ障害がわかる本ー
「障害」を「個性」に変えるためにー 法研

大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究
ー現代日本青年の心情モデルについての検討ー
教育心理学研究, 32, 100-109

斎藤清二・西村優紀美・吉永崇史 2010 発達障害
大学生支援への挑戦ーナラティブ・アプローチと
ナレッジ・マネジメントー 金剛出版

佐藤文子・志村結美・深谷純子 2004 時間的展望
における自己認識と生活実践 千葉大学教育学部
紀要, 52, 103-108.

Wing, L. 1996 *The Autistic Spectrum: A Guide
for Parents and Professionals*. Constable
Company Ltd.: London. (ウィング, L 久保絃
章・佐々木正美・清水康夫(監訳) 1998 自閉症
スペクトルー親と専門家のためのガイドブックー
東京書籍)

付 記

この論文は、第二著者(宮原)が富山大学教育学
部に提出した特別研究論文のデータを再分析し、第
一著者の責任で改稿したものである。

本研究における統計処理は、SPSS 18を用いた。

(2011年10月20日受付)

(2011年12月14日受理)